

## NHK アーカイブスの保存映像に見るアイヌと樺太先住民、そして捕鯨

宇仁義和

公募研究「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」により、NHK が保存する一般には未公開の映像を閲覧した。アイヌの映像には戦前の資料があり、戦後でも斜里沖でのアザラシ猟、クジラ鯨猟の再現、鯨祭りなどが見られた。捕鯨では、地域総出の太地の追い込み漁、モラトリアム発効前後の報道姿勢の変容や話者の態度など、文章からは知り得ない情報を得ることが可能であった。関連して、昭和 9 年（1934）の映画「産業の樺太」にオタスの先住民の様子が含まれていたことを紹介した。【本号「研究ノート」として掲載】

（うに・よしかず／東京農業大学 博物館情報学研究室）

## 河童伝承からみるアイヌ語「ミントウチ」と日本語「ミヅチ」の関係性

矢崎春菜

アイヌの口承文芸にも、いわゆる「河童」が登場する。そして、その名称や伝承にみられる特徴には、いくつかの日本（和人）の河童との共通点がみられると指摘されている。

アイヌ語で「河童」を意味する（あるいは訳される）名称には、「シリサマイヌ（山側の人）」、「オソイネブ（他から来たもの）」、「ミントウチ（あるいはニントウチ、フンドチなど）」といったものがある。そのうちの「ミントウチ」という名称は、日本語からの借用語とされており、東北地方で河童を意味する「ミヅチ」系の名称がアイヌ語に借用されたものであると考えられている。本発表では、この借用語とされる名称に注目し、“アイヌ語の「ミントウチ」は東北地方の「ミヅチ」系の名称、すなわち「メドチ」や「ミズシ」といった河童の名称が借用されたものである”ということを前提として、「ミントウチ」と「ミヅチ」の関係について、どのような借用の可能性が考えられるのかを、アイヌ語に重点をおいて考察していくことを試みた。

今回は、辞典をはじめ口承文芸（昔話）に関する文献を資料として使用した。まず、それぞれの語形と分布をみてみると、アイヌの場合、「ミントウチ（ミントチ・ミンツチ・ミンヅチ・ミムトウチ）」系の語形は、白老・沙流・鶴川・静内・新冠・名寄・千歳・旭川に分布し、うち千歳と旭川では「ニントウチ（ニントチ）」系の語形もみられた。そして、「フンドチ（ハンドチ・フンヅウチ）」系の語形は十勝・釧路に分布していた。一方、東北地方では「メドチ（メトチ、メドツ、メットーヅ）」系の語形は青森県・岩手県に分布し、「ミズシ（ミソシ、ミスズ）」系は石川県に分布していた。

また、今回はごく簡単にではあるが、それぞれの名称の語構成について確認したところ、「ミヅチ」は「ミは水、ツは助詞、チは霊で、水の霊の意」（『広辞苑』）というように、その構造が分析できる一方で、アイヌ語の「ミントウチ」はどこの方言かなど詳細がよく分からないものを除くと、その語構成に関する記述はみられなかった。

以上のような名称の分布をふまえて、次に先行研究での記述を確認しながら、考察を行

った。先行研究によると、日本語からアイヌ語へ借用される際の音韻の変化から考えて、「ミントウチ」は「ミヅチ」からの借用であるといわれている。例えば、「アヅキ（小豆）」は「アントウキ」、「コソデ（小袖）」は「コソソテ」となるように、日本語からアイヌ語へ借用される際、濁音の清音化と撥音の挿入（語中で、ガ・ダ・バ行音はカ・タ・パ行になり、その前に挿入された鼻音が撥音「ん」となって受け入れられる）といった音韻の変化がみられる。「ミヅチ」の場合もこのように、「ヅ」が「ツ」あるいは「トウ」というように濁音が清音に変化し、タ行の前に「ン」が挿入され、「ミンツチ」あるいは「ミントウチ」となると考えられる。

しかし、先行研究ではこのように「ミントウチ」系の音韻変化については論じられているが、最初の音が全く異なる「フンドチ」系の語形については特にふれられていなかった。「フンドチ」系に対応するような東北方言があるのかどうかについては、今のところは確認できていない。日本語からの借用であると考えた場合、音韻変化からは借用語として考えにくい「フンドチ」系の語形についてどのような可能性が考えられるのかは、今後の課題としたい。

ここで、「ミントウチ」が借用された時期に関する先行研究をみると、東北地方のメドチ類が河童を示すようになったと思われる時期と、アイヌの河童伝承にみられるタバコや疱瘡といった外来の要素からみて、江戸時代のはじめであろうと考えられている。また、アイヌの口承文芸において、「ミントウチ」をはじめとする「河童」が登場する物語がいくつもあり、そのなかで「河童」がカムイ（神様）としての扱いを受けているものも少なくないということからも、借用された時期が比較的近年ではないと考えられる。このことをふまえて、今回は今後に向けて次のような仮説を考えた。

まず江戸時代の初めころに東北地方の「ミヅチ」がアイヌに伝わり、次第に「ミントウチ」と呼ばれる“川にいるカムイ”、すなわちアイヌ独特の要素がみられる「河童」的存在の物語として伝承されていくようになるとともに、伝播の過程で地域差や方言差が生じて「ミントウチ」「ニントウチ」「フンドチ」の物語となっていった。そして、時代と共に和人の河童伝承を聞く機会が増えていき、すでにアイヌの伝承にあった「ミントウチ」たちと同一化して、和人の河童伝承との類似点が多いアイヌの河童伝承が伝えられていくようになった。このように、和人からの伝播はいくつかの段階を経ているため、和人の河童との共通点のあり方が多様であるのではないかとと思われる。

今後は、特に「フンドチ」について調査するとともに、今回あまりふれなかった東北地方の「ミヅチ」類、そして名称だけではなく河童伝承の物語としての関連性についてさらなる調査を進める必要がある。

（やざき・はるな／北海道大学大学院文学研究科 博士課程）

# 除雪具—雪かき（ジョンバ）—の道内での適応性とその製作過程

小西信義

## 1. はじめに

昭和40年代までの北海道における代表的な除雪具として、竹製のジョンバ（雪かき）が挙げられる。氏家（1989: 63-66）によると、道内乾雪の除雪に適した道具だと言われている。実際、現在の道内でもジョンバは主に玄関先の新雪を簡易的に払うことを目的に、多くの家庭で使用されている。また、ジョンバは、スコップに比べ軽いため、女性や高齢者などにより多用されているようだ。ただし、いくら乾雪の軽い新雪と言え、多くの雪を除雪するには不向きな道具で、人力除雪の範囲では、ジョンバ・スコップ・ママさんダンブの使い分けが一般的な除雪方法と言えるだろう。

本報告では、降雪統計資料を用い、改めてジョンバの道内における適応性について考察する。また、プラスチック製ジョンバが普及している現在、竹製ジョンバの製作過程を記録に留めるため、旭川在住の籠職人への聞き取り調査結果も併せて報告する。

## 2. ジョンバとコスキ

現在、道内で普及しているプラスチック製のジョンバや全国の豪雪地帯で一般的に使用されるアルミ製・鉄製スコップが使用される以前、雪国の人びとは主にコスキや木製や竹製のジョンバを使用していた。

新潟では「雪との戦いにおける唯一の武器は、木製のコスキである」（滝沢 1985: 194）というように、一本の木から製作された、積雪をサイコロ状に切り崩して除雪する、へら状のコスキが主力として使われていた。粘性があり、含水率の高い新潟の雪質を鑑みれば、遠くに投擲するよりも、切り崩してコスキに載せる除雪方法が適していたのだろう。



写真1 木製ジョンバ（上中段）とコスキ（下段）  
（北海道開拓記念館所蔵）

一方、北海道では、コスキ（写真1）が、近世以来道南地方あるいは明治期の内陸部において明治末期から大正期頃まで使われた時期もあるようだが、雪をはねる部分の左右と後方に帆板を取付けたへらと柄によって構成された木製のジョンバ（写真1）や、竹編みをしたへらと柄によって構成された竹製ジョンバなど多様性に富んだ除雪具も使用され、名称の細かな違いは地域ごとに存在したもの、概ね「ジョンバ」と呼ばれていた。

本報告では、コスキは豪雪地帯では広く使用されていたが、ジョンバの使用には限定性があることに注目し、その限定性と適応性を検討する。微細な自然環境の違いに人びとが細やかに対応してきた姿を描き出す一助となることを目的に調査を行った。

## 3. ジョンバの道内における適応性

ジョンバの適応性について氏家（1989: 64）は、北海道の雪は湿り気が少なく、軽い雪質のために

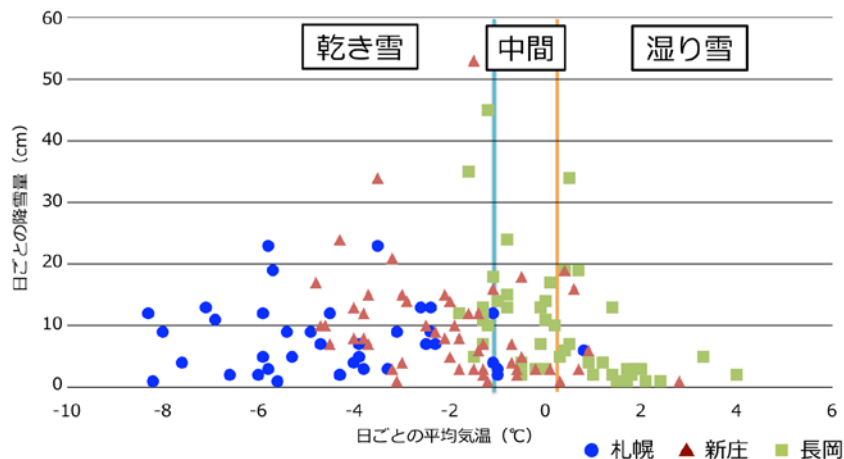


図1 3地点における降雪の乾湿分布

ジョンバが好んで使われたと言う。この主張を再考するために、本調査ではまず、北海道立開拓記念館や新潟県立歴史博物館の所蔵資料やそれに関連する図録、『風俗画報』などの民俗資料から、ジョンバ使用地（札幌・山形県新庄）とジョンバ未使用地（新潟県長岡）を分類した。次に、石坂（2008: 16）の雪質区分に基づき、気象庁が記録する過去30年分の3地点の日ごとの積雪量と平均気温を採用し、分類した各地点の降雪の乾湿の判定を行った。

上記の手続きによって得られた散布図（図1は、2012-13 厳冬期のみ）から、札幌の降雪には、乾き雪が集中し、日降雪量は2地域に比べ少なく、新庄の降雪では、乾き雪が散在し、中間・湿り雪に集中する上、日降雪量も多く、長岡の降雪には、湿り雪・中間が集中していることがみられ、それは氏家の主張を支持した結果を示した。つまり、札幌・新庄には乾き雪が見られるため、乾き雪に適したジョンバが使用され、湿り雪でかつ日降雪量の多い長岡では、ジョンバよりもコスキのほうが除雪に適していたと考えられる。

#### 4. 竹製ジョンバの製作過程

竹製ジョンバの製作過程に関しては、先行研究がなく、プラスチック製ジョンバが普及している現在において、竹製ジョンバの記録を収集しておくことは、雪国の民俗をアーカイブするという点において重要である。そこで本調査では、旭川在住の竹籠職人K氏（77歳）の竹製ジョンバ（写真2）の製作風景を記録し、加えて、聞き取り調査も行った。

中頓別町にあった竹籠店で育ったK氏は、民間企業を定年退職後、父の作業風景の記憶を思い出し、現在竹製ジョンバを生産している。製作において注目するところは、①雪離れを良くするため、表皮はすべて同



写真2 K氏が製作した竹製ジョンバ  
（柄長1680mm、へら幅520mm）  
（2013年10月著者撮影）

じ面になるように編むこと、②強度を得るため、割いていない竹棒をへら部分に編み込むこと、③乾燥とともに竹が堅くなるので、半生の竹で編み込むことであった。編み方は、六角形の編み目をへら部分に規則正しく配列する六目編みであった。

竹製ジョンバの動向としては、平常 10 本程度の生産だったが、新聞やテレビなどの報道もあり、今年は 100 本程度の受注があり、プラスチック製ジョンバが常用的であるにも関わらず、需要があるようだ。また、竹籠全般だが、竹籠教室をしており、「ジョンバを絶やさないように」とK氏は後進の指導も行っている。

## 5. 両調査における今後の課題

ジョンバの道内における適応性については、降雪だけではなく、積雪の硬度や密度、含水率なども分析の対象とし、雪氷学からの知見を参照していきたい。また、ジョンバ使用圏と未使用圏の境界精度を高めるため、今回扱った 3 地域以外の民俗資料収集を進めていきたい。ただ、ここで除雪具の使用は、当然自然環境が唯一の規定因であるとは言えず、ジョンバが普及するに至った社会背景や歴史的背景を踏まえた総合的検討を今後試みていきたい。

竹製ジョンバの製作過程については、今後、ジョンバ製作に適した竹を知るため、ネマガリダケの採集の様子も記録していきたい。また、柄の材質や柄の取り付け面の違いのように、作り手や生産地域による細かい違いも記録するため竹籠職人に関する先行研究に調査範囲を広げ、竹製ジョンバにおける正確な記述を進めていきたい。

## 謝辞

本調査におけるアイデアや分析などで、安達聖（独立行政法人防災科学研究所）、大宮哲（名古屋大学環境学研究所）、佐藤浩輔（北海道大学大学院文学研究科）、村上智彦（ゲンカンパニー）のご助力を賜った。ここに深く感謝を申し上げます。

## 注

降雪の乾湿の判定の基準は、当該日の気温が $-1.0^{\circ}\text{C}$ 以下のときを乾き雪、 $0.3^{\circ}\text{C}$ 以上のときを湿り雪とする。また、 $-1.0^{\circ}\text{C}$ から  $0.3^{\circ}\text{C}$ のときは、乾湿の遷移的な性格をもたせた「中間」と石坂（2008: 6）は設定している。

## 参考・引用文献

石坂雅昭

2008 『新メッシュ気候値に基づく雪質分布地図の作成と近年の日本の積雪地域の気候変化の解明』平成 18 年度－平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書。

氏家等

1989 「除雪具（雪かき）の変遷と雪押しの発生と発達過程」『北海道開拓記念館研究年報』17：63-75，北海道開拓記念館。

滝沢秀一

1985 「越後魚沼地方の除雪とコスギ」『日本民俗文化大系 13 技術と民俗 上-海と山の生活技術誌-』194-196，小学館。

（こにし・のぶよし／北海道大学大学院文学研究科）

## 樺太アイヌの竪穴住居利用について —岡正雄・馬場脩の調査写真を中心に—

田村 将人

20世紀初頭まで樺太アイヌは、千島アイヌと同様、夏季の平地住居、冬季の竪穴住居と季節によって家屋の形態に区別があったことが知られている（北海道では擦文文化の終わる12～13世紀以降、竪穴利用は確認されない）。同時代、樺太、千島の両方で調査を行った鳥居龍蔵は、当時の日本人起源論に決着をつけるような調査を行っていた。たとえば、当時の北海道アイヌと千島アイヌの間には竪穴利用に対する考え方の違いがあったことが鳥居の1899年の見聞からわかる。エトロフ島アイヌの老婦人の言として、「我々がこの島に来る前は、ここにトイチセクル（土の家の人の意味≡コロポックル）と呼ばれる人々が住んでいた」とし、彼らは石器や粗末な土器、小柄な身体でアットゥシを引きずり、アイヌと沈黙交易をしていたという。これに対して、鳥居の案内役を務めていた千島アイヌのグレゴリは、「トイチセクル、それはどういうことなのだ。ヤンクル（蝦夷アイヌ）の愚かな作り話ではないか。いわゆるトイチセクルは我々自身のことである」とし、つい最近まで石器や骨角器を使い、土器も使っていたが、「我々は真のアイヌで、アイヌ以外の何者でもない」と激怒したと記録されている。

また、ポーランド人でサハリン流刑後、民族学者になったブロニスワフ・ピウスツキは、1900年ころのサハリンにおいて、次のようなことを聞いている。中北部に住むニヴフとウイльтаとともに、樺太アイヌより後にサハリンへ来たと語っており、残されている竪穴住居跡を樺太アイヌの古い住居だと認識している。その樺太アイヌは、石器や土器はトンチ（北海道でのコロポックルのような存在）が残したものとするが、自分たちの冬季の竪穴住居と、トンチが住んだ竪穴跡を区別する。しかし、樺太アイヌはトンチについて語りたがらない。1904年、ピウスツキは親友となった樺太アイヌ男性から、実はトンチは樺太アイヌより先住者であることが明らかなので、そのことが知れたらロシア人によってこの土地から追い出されるのではないかと懸念している、という理由を聞くことができた。

北海道アイヌと千島アイヌの間においては、北海道アイヌが描くいわゆるコロポックル像が千島アイヌの文化と重なることを前提に、千島アイヌは後進的なイメージを押し付けられたことに怒っている。また、サハリンにおいては、樺太アイヌ自身が伝説上のトンチをいわば“先住者”として認めているため、新たな統治者のロシアに正当な住民だと認められないのではないかという懸念を引き起こしている。ほんの一例に過ぎないのだろうが、竪穴利用の有無が文化的な軋轢を引き起こし、また先住性の証明にもなることが、1900年前後にあったことが確認できる。

竪穴利用の終焉については、日露戦争以降の南サハリンの日本統治で樺太アイヌは集住化されたこともあるが、1905年1月頃にインフルエンザが流行し多数の死者が出たことが契機となったという記録もある。これまでは、竪穴利用に関しては主に絵画や民族誌などから検討されてきたが、1910年前後に撮影されたと考えられる民族学者・石田収蔵の旧蔵写真（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構所蔵）や、1937年の岡正雄、馬場脩による調査写真（北海道立北方民族博物館所蔵）を利用して、廃墟となった竪穴住居の写真からその実態を紹介した。なお、岡・馬場写真の中には、サハリンへの移住者であ

る和人および朝鮮人の竪穴住居跡の写真も含まれており、地域的な特性を考える可能性もあることを指摘した。

(たむら・まさと／札幌大学)

## あるオプシーナの挑戦—サハ共和国の事例より

中 田 篤

本発表では、ソ連崩壊後のロシアで主に先住民の家族・親族を中心として営まれる小規模な経営形態である遊牧氏族共同体（オプシーナ、以下、共同体）を取り上げ、サハ共和国東部で設立されたある共同体の活動事例とその問題点を提示した。

最初に、現在の共同体制度が制定される以前のロシア／ソ連におけるトナカイ牧畜の状況について概観した。20世紀以降の約100年間、ロシア／ソ連における家畜トナカイの頭数は、120万頭（2001年）～250万頭（1969年）の間で大きく変動した。社会主義体制の確立に伴い、1930年代前半に始まった家畜の共同所有化の過程で多くの家畜トナカイが失われた。その後、一時的な減少はあるものの、全体的には家畜トナカイ頭数は増加し、1960～1990年代には最大値に達した。ソ連崩壊に伴い、1990年代～2000年頃に家畜トナカイ頭数は激減したが、2000年代半ばから現在にかけて、ロシア北部の大部分の地域でトナカイ牧畜が復活し、2009年までに家畜トナカイ頭数は151万7,500頭にまで回復している。

家畜トナカイ数の変動は、サハ共和国もロシア全体とほぼ同様の傾向を示している。ソ連時代、サハ共和国はトナカイ牧畜がさかんな地域の一つとされ、最大で36万頭以上の家畜トナカイを飼育していた。1991年から家畜トナカイ頭数の減少が始まり、2003年には13万4,882頭にまで落ち込んだが、その後はサハ共和国政府による総合的な支援もあり、2004年以降は増加傾向を示している。

ロシアにおけるソ連崩壊後の農業経営組織形態は、かつての集団農場や国営農場を再編した大規模農場である農業企業。独立自営的な経営体である農民経営、小規模自給的な経営である個人副業経営の3つに大別される。こうした代表的な経営形態とは別に、おもに先住民の家族・親族を中心として営まれる小規模な経営体として創設されたのが遊牧氏族共同体である。

サハ共和国で1992年に制定された「北方少数民族遊牧氏族共同体に関する法律」（吉田 訳 1996）によれば、遊牧氏族共同体は、北方少数民族の生活様式、文化、言語の復興、保存及び発展を目的としたものであり、その構成員は、エベン、エベンキ、ユカギール、チュクチ、ドルガンといった北方少数民族とその家族、および彼らと同様な伝統的生活を送る人びとに限られている。また、遊牧氏族共同体は、土地、更新可能な自然資源、農業・狩猟・漁撈用地は無期限に無償で使用することができ、さらに補償金、補助金、免税、無料の医療保険・教育といった特典が与えられるなど、法的にさまざまな優遇措置が講じられている。こうした条文から、共同体制度の創設は、北方少数民族が伝統的生業・文化を維持することを意図したものと考えられる。

しかし現実には、共同体は組織運営上のさまざまな困難に直面している。1998年、かつ

て国営企業でトナカイ牧夫として働いていた P 氏の子どもたちが中心になり、サハ共和国東部の T 郡に P 遊動氏族共同体（以下、P 共同体）が設立された。P 共同体は、かつての国営企業の後継組織であり、P 氏やその子どもたちの勤務先でもあった農業生産組合 T（以下、組合）から家畜トナカイ78頭を分与され、放牧を開始した。

しかし、組合側がバガダエフ共同体の土地使用を完全には認めなかったため、両者の関係に問題が残ることになった。まず、組合側は、P 共同体によってトナカイの放牧地、狩猟用地、漁撈水域が不正に使用されているとして郡行政府に告発した。その後、1999年の組合と P 共同体間の交渉で P 共同体側への土地分与に関する協定が締結されるが、その際、事前に約束されていた領域から重要な区画が除外されていたため、実質的にはそれ以前の状況が続いた。さらに2000年、組合側の会議で P 共同体側に土地を分与することが決定されたが、その議定書でも P 共同体側に十分な土地は配分されなかった。2001年春、P 共同体側がサハ共和国の行政機関に提訴したのが契機となり、同年7月2日に土地保証証明書が交付され、ようやく P 共同体は遊動氏族共同体として正式に登録された。しかし、分与された土地には大規模な頭数のトナカイを飼育する資源が不足していたため、結局 P 共同体側は以前と同じ地域でトナカイ牧畜や狩猟・漁撈活動を継続せざるを得なかった。

こうした状況のもと、P 共同体では徐々に家畜トナカイ頭数を増やし、2009年時点で約800頭を所有するまでになっていた。一方、組合では各500～1000頭から成る12のトナカイ群を管理していたが、そのうち4群が P 共同体のトナカイ群を囲む地域で放牧されていた。各群にはそれぞれ一定の放牧範囲が割り当てられているが、柵などで仕切られているわけではないので、家畜トナカイが隣接する群に混入することがある。P 共同体の放牧者たちは、組合所有の二つの群に彼らが所有する家畜トナカイのそれぞれ100頭、150頭程度が混入していると考えていた。

その後、2010年9月の時点で、P 共同体はそれまで利用していた放牧地から約150km離れた別の地域に放牧地を移転する過程の途上にあり、その最初の段階として家畜トナカイの一部（オス約70頭）を新放牧地に移したところだった。新放牧地には1家族が駐在し、家畜トナカイの管理に当たっていた。一方、旧放牧地には2家族が滞在し、残りの家畜トナカイの放牧をおこなっていた。放牧地移転の要因として、P 共同体の家畜トナカイが隣接する組合の群に混入し、失われてしまう問題が挙げられた。こうした問題を避けるため、P 共同体は組合の放牧地から離れた場所に新放牧地を確保したのだった。翌春には所有する家畜トナカイすべてを新放牧地に移す予定だが、その準備としてまずオスの一部を移動し、群を慣らしているとのことだった。その後2012年2月には、まだ旧放牧地に一部の家畜トナカイが残されていたものの、約500頭が新放牧地に移されていた。

P 共同体では、設立以来10年以上にわたって組合との間に土地利用の問題を抱えながら家畜トナカイ頭数を増やしてきた。しかし、最終的には組合の放牧地から離れた地域に土地を取得し、放牧地を移転する道を選択したのである。この事例のように、地方行政府による国営農場・集団農場を氏族共同体に置き換える試みの多くは、必ずしも順調には進まなかったとされている。共同体設立の際には、その時点での土地利用者（多くの場合、国営農場またはその後継組織）の合意を得る必要があるが、それが困難だったためである。共同体の制度や実態に関してはこれ以外にもさまざまな問題が指摘されているが、今後も共同体制度がどのように活用され、共同体の実態がどのように変化していくのか見守って



いきたいと考えている。

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)

## ウイлтаの暮しとことば—サハリンにおける言語の伝承と変容

山田祥子

近年のサハリン（樺太）において、先住民ウイлтаの文化がどのように受け継がれているのか。本発表では言語に焦点を当て、近年のサハリンにおけるウイлта語の伝承と変容について現地調査にもとづく報告を行った。

ウイлтаの伝統的な言語であるウイлта語はツングース諸語の一つであり、なかでもアムール川下流域で話されてきたナーナイ語やウルチャ語と近い親縁関係にある。ウイлта語の方言は、サハリン北東部のワール村を中心とする地方で話されてきた北部方言と、中東部のポロナイスク市を中心とする地方で話されてきた南部方言とに二分される。今日のサハリンに居住するウイлтаの民族人口は 300～400 人とみられるが、そのうちウイлта語を話せるという人は二つの方言を合わせても 10 人に満たない。ワール村でウイлта語の話し手が交流するとき知識を互いに確かめ合うように心がけてウイлта語で話すことがあるが、そのような特殊な場面を除き、日常会話はもっぱらロシア語で行われている。

ウイлта語が日常会話に用いられなくなった一方で、地方特有の俚言や固有名詞にウイлта語が残っていることがある。発表者が現地調査で聞いたところによると、ベリー集めやトナカイ飼育に関連する用語、人名（通称）、地名などが、標準的なロシア語ではなくウイлта語の特徴に通ずることがある。ただし、ウイлта語本来の音形から変化していることや、近隣に居住する先住民の言語など他の言語にも共通することがあるため、どの語がウイлта語に由来するか確かめるには精査が必要である。

伝統文化の保存・復興のための社会的な取り組みのなかで、ウイлта語を受け継ぐ動きもみられる。ポロナイスク市で活動する民族アンサンブル「メングメ・イルガ」（ナーナイ、ニヴフ、ウイлта合同）、ワール村の「ソロジーエ・アンサンブル」などは、歌や踊りなどの伝統芸能のなかでウイлта語を受け継いでいる例である。2011 年からユジノ・サハリンスク市で 8 月 9 日の国際先住民デーに開催されているコンクール「ミス北方民族」（Северяночка）でも、ウイлта語を含む北方民族の言語によるスピーチや歌などが若い世代によって披露される。また、伝統芸能とは別に、ポロナイスク市の学校（小学 2～4 年生対象）、ノグリキ町の郷土博物館（大人・子ども対象）などでウイлта語の学習が行われている。

俚言や固有名詞、伝統芸能やウイлта語学習で受け継がれているウイлта語には、従来の記述・研究では見られなかった特徴がある。それらは、たとえば、本来は長母音だった部分が短母音になるなどの音韻的な変化、名詞の対格形などにおける文法の簡略化によって生じた新しい特徴と考えられる。また、ロシア語からの音訳による語彙や、ウイлта語学習用の詩歌（文芸）も新たに生み出されている。

(やまだ・よしこ／北海道立北方民族博物館)